

平成二十二年読書感想文コンクール作品集

も
さ
く

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目次

講評・その他

入選 第一位 得れば何かを「失う」
— 『アルジャーノンに花束を』 を読んで

入選 第二位 「生きるとは何か」 — 『神様のカルテ』 を読んで

入選 第三位 『十五少年漂流記』 を読んで

佳作 『レキシントンの幽霊 — 沈黙』 を読んで

// 『人間失格』 を読んで

// 『ホームレス中学生』 を読んで

// 『終末のフール』 を読んで

// 『告白』 を読んで

// 『涙忘恋歌』 を読んで

// 『フランダーズの犬』 を読んで

編集後記

一般科目	国語科教員	相本正吾	……	1
制御情報工学科	四年	松下達也	……	2
制御情報工学科	四年	橋本隆太郎	……	3
機械工学科	四年	宮崎聡志	……	4
電気電子工学科	一年	矢野紘樹	……	4
都市システム工学科	一年	諫山恭平	……	5
機械工学科	一年	岩丸尚輝	……	6
制御情報工学科	一年	宮崎慎也	……	7
都市システム工学科	四年	玉田舞香	……	7
電気電子工学科	四年	橋爪里奈	……	8
電気電子工学科	一年	秋月貴裕	……	9
学生図書委員長 (制御情報工学科 五年)		梨子木亮太	……	10

講評・その他

一般科目・国語科教員

相本 正 吾

本年度は、例年と同じく、まず、国語科目の夏休みの課題として提出された各クラスの読書感想文自主投稿の読書感想文の中から国語科教員によって優秀作が選出され、次に、それらの優秀作に対して教員図書委員と学生図書委員によって第二次審査が行われ、さらに、国語科教員による最終の第三次審査を経て、入選の三作品（第一位～第三位）及び佳作の七作品が決定されました。

第一位の栄誉を得た松下達也君の『「アルジャーノンに花束を」を読んで』は、画期的な脳手術によって望んでいた高い知能を得た主人公の悲劇的な物語を通して、得ることは失うことである、一方、失うことは得ることであるという私たちの生活や人生の姿やその選択の難しさについて思いをはせています。松下君の作品は、入賞作品の中では、文章の表現力において抜きん出て優れていて、感心するところがありました。

第二位を得た橋本隆太郎君の『「神様のカルテ」を読んで』は、医師の治療医療活動の延

命処置の是非について、医師患者のお互いの生き様のことも含め、いろんな観点から深く考察していて、読みごたえがありました。橋本君の文章も同じく、文章の言葉や表現がしっかりとあります。

第三位を得た宮崎聡志君の『「十五少年漂流記」を読んで』は、無人島に漂着した少年たちが助け合って島からの脱出を図る知られた物語を読み、少年たちの相手に対する態度のうち、相手に真正面から向き合って相手のよくない部分に対しては直していくよう忠告する態度に注目し、そういったお互い思いやる態度や心があつてこそ少年たちの団結はうまく行くのだという捉え方は鋭いものがありました。

佳作となった七つの作品も、作品の内容に対する捉え方やその表現において優れていて、見るべきものがありました。自分の言うことを誰一人信じてくれないのではないかと沈黙（不安）に耐えてその不安を乗り越えた主人公と自身を重ねて自身の対人関係のあり方を見直した矢野君の作品、人と心の触れ合いが本来に自分を偽り隠して道化を演じてしまう主人公の姿に現代の私たちの対人関係の傾向を見た諫山君の作品、失つて初めて初めてわかる私たちの日々の当たり前の生活のありがたさについて考えた岩丸君の作品、数年後に地球が滅亡するという事態における物語を読んで掛け替えの無い私たちの日々の生活のことを考えた宮崎君の作品、娘を殺された女性教師の復讐劇を読みそれ

ぞれの親心に注目した玉田さんの作品、心に病を持つ患者たちに薬を処方する薬師の話を読み与える側と受ける側の思いやお互いの心の触れ合いに注目した橋爪さんの作品、少年ネロとその忠実な老犬の触れ合いを描いた有名な物語を読んで彼らの不幸についてあらためて考えてみた秋月君の作品、いずれの作品も、読む私たちにいろいろと大事なことを考えさせてくれる作品となっています。

今年の投稿された読書感想文には、その作品の内容についての世間一般の従来の見方や捉え方に対して、自分が受けとめた自分独自の見方や感想を述べているものが数多くあり目立ちました。作品の内容を単に鵜呑みにして受けとめて消化不良のままに終えてしまう読書などに比べ、読んで自分で感じ自分で思った印象や気づきを大事にして、それらの問題点を自分でよく考えてその作品を消化していくことは、読書において非常に大切なことです。作品に対するそういういった主体的で批判的な読書活動の姿勢は今後も大事にしたいと思います。コンクールに向けての各人の読書の取り組みと読書感想文の投稿が、読書が習慣や好みになっていない学生にとって日常の読書や思索を進めていく良い機会やきっかけになっていくことを国語科の方では期待しています。次回に向けて、投稿に関しては、高学年低学年を問わず、積極的な自主投稿も歓迎します。

入選 第一位

得れば何かを「失う」
—『アルジャーノンに花束を』を読んで

制御情報工学科 四年

松下 達也

『アルジャーノンに花束を』は、全編にわたってチャーリー・ゴードンという一人の青年の視点から描かれており、彼が書いた経過報告という形でまとめられている。

斬新な手法で書かれたこの本と出会ったのは私が小学生の頃であるが、今になってもう一度読み返してみた。すると、気づかなかった重大なことをたくさん発見できた。

主人公のチャーリーは精神遅滞者であって、小説前半の彼が書く経過報告は、字の間違いだらけでなんとも読みにくい。だが新しい独創的理論に基づいた脳手術により、チャーリーは驚くべき高さの知能を手にする。わずか数ヶ月で天才になってしまったのだ。

知能が高まるという奇跡は美しく、なぜか物悲しい。今までの自我が認識する世界が崩れ去り、感じなかった苦しみを感ずるようになる。そして同時に、何か大事なものが失われていく。暖かいものが冷えていく。

私は、「得る」ことは「失う」ことだと気づいた。何かを知ってしまった人間は、もはや知

らない当時の人間には戻れない。「知る」というのは今の自分を捨てて新しい自分になるということだ。だから時折、大事にしていたもので一緒に捨て去ってしまう。

知能が最大限に高まったチャーリーに、思い描いていた幸せは待っていなかった。ただただ、氷のように冷たい何か背中に乗っている……。ついに彼は私たちの精神的認知を超越し、霊的世界にまで自我を展開する。

ところが、彼の知能はそれから急激に低下していく。知能を高める理論の誤りを示唆したのはチャーリー自身で、転じて彼は忘却という恐怖におののくことになる。

小説後半は胸がつまる。戻りたくないという苦しみ。と同時に、今までの巨大な冷たいものがすうーっと消え、信じられないことに失われた暖かい何か舞い戻ってくる。

私たちが子どもの頃は、誰でもこの「暖かい何か」を持っていた。そして、失った。私たちは知能が高まる段階のチャーリーと同じなのだ。学校で新しいことを知れば知るほど、私から何か失われる。だから思い出は恋しい。だから思い出は暖かい。

チャーリーは知能を失っていくが、同時にかけがえのないものをたくさん手に入れる。失うこともまた「得る」ことなのだ、彼は私に気づかせてくれた。

小説最後の二行で涙が止まらない。そこにはチャーリーからの強いメッセージがこめられて

いる。「忘れないでね」という願い。優しさ。私は暖かくなった。

今、学校に通う私は日々新しいことを「得る」。だが失う時期もきつとくる。老いか病かは分からないが、チャーリーのようにきつと……。命を持つ者ならば誰にでも、思い出のあの日に帰る瞬間が来るのだ。

得て失う。それが生きるということだ。



入選 第二位

「生きるとは何か」 —『神様のカルテ』を読んで

制御情報工学科 四年

橋本 隆太郎

知つての通り、日本は世界でも指折りの長寿国である。高齢者の数は年々増加の一途を見せしており、それに伴って医療関係者への負担も増加。特に地方での医師不足は深刻なものとなっている。この物語の主人公である若手医師も地方病院での過酷な勤務にあえぐ毎日を送っていた。そんな中、一人の老患者が容態を急変させる。胆のう癌。凄まじい速度で増大した腫瘍は、もう手の施しようのないものであった。余命は、半年。

ここ最近の医療技術の進歩には目覚ましいものがある。脳死に至り、植物状態となった人間も生命維持装置によって生かしておくことができるだろうし、癌で助からないと診断された人も薬物投与などによって少々の余命を伸ばす程度のことはできるだろう。しかし、それには必ず相応のリスクと痛みが付きまとう。果たして、そこまでして命を引き伸ばすことが本当に正しいことなのだろうか。もし、自分がそれを判断する立場にあるとしたら、一体どうすればいいのだろうか……。

物語の中でも、主人公は医師としてどうすべきなのかを思い悩む。その患者は早くに夫を亡くし、子供も親戚もないひとり暮らし。どこか達観したかのように穏やかな女性だった。主人公は彼女に接し、心を通わせる。そして再び容態が急変した時、主人公は決断する。延命治療はこれ以上行わず、旦那さんに会いに行くのを見送ろう、と――。

もう助からない人、つまり癌末期患者などに行う医療は、非常に難しいものがあるだろう。現代の驚異的な医療技術を用いて、家族や医療者たちの望むままに患者を生かし留める。それも確かに一つの正しい決断なのかもしれない。否、正しい決断など無いのかもしれない。だが、機械につながれ、ただ呼吸を続けるような状態になって心臓を動かす期間を数日延ばすということが本当に「生きる」ということなのだろうか。主人公と共に私もまた、考え悩んでいた。

私知知っている言葉に、「生きている」と「生かされている」のは違う。そこに自分の意志があるかどうかの問題だ」というものがある。そう、様々なかたちこそあるが、自ら「生きようとするから」いのちはとても楽しく、美しい。私はそう思う。主人公も、絶える命を引き伸ばしているなどと考えるのは傲慢だ、定められた長さのいのちを掘り起こし、より良い最期の時を創り出していくのが医師という存在ではないか、と結論する。

来るいのちがあれば、去るいのちもある。高

齢者の増えた昨今、いつかは必ずそういった場面に会う時が来るだろう。いずれにせよ、そこで必要となるのは、その人が精一杯「生きた」ということをしっかりと感じ、見送ることができるとはどうかではないだろうか。



入選 第二位

『十五少年漂流記』を読んで

機械工学科 四年

宮崎 聡志

今の社会において「裏切り」や「偽り」は日頃共に生活している「仲間」という存在にすら行われることがある。私に通う学校という場所でもその行為はよく見られる。

しかし、十五少年漂流記に登場する子供達は、互いを信じ合い、助け合いながら成長していく。彼らにあって、私達に無いもの、もしくは無くしてしまったものは、一体何なのだろう。

十五少年漂流記は、その名の通り、十五人の少年達が海で遭難し、ある無人島に漂着し、そこから何とか脱出しようとする様子を書いたものである。まずこのような状況に陥ることはないだろうが、私がこの本に惹かれた理由は、少年達との年齢の近さだろう。

本編に登場するブリアンとドニファンは、共に十三歳で、ブリアンは正義感が強く周りの信頼も厚い。しかしドニファンは、根はいいやつなのだが、わがままで、目立ちたがり屋である。当然、このような二人がいれば、仲間割れが起きてしまう。だが、こうした時に私達と違うと

ころは、相手の気に入らない所は、相手に直接はつきりと言うことである。

もともと私達日本人は、「相手を思いやる心」というものを大切にしてきたが、こういった考えが、間違った場面で使われているような気がする。ブリアンとドニファンのように、相手の悪い部分を直してもらいたい時、「こう言ったら傷つけてしまうかも」とか、「こう言ったら嫌われてしまうかも」などと考えているうちは、相手にどこをどうしてほしいかなどということとは伝わらない。相手を思いやるということとは、そういうことではなく、ハッキリと相手の悪い部分を告げ、直してもらおうことが、自分のためにもなり、さらに相手のためにもなるのである。

はじめに言ったように、「十五少年漂流記」に登場する少年達にあって、私達にないもの、それは、相手と真正面から向きあうことである。そういったことが出来ないがために、平気で仲間を裏切ったり、嘘をついたりすることが出来るのである。

十五少年漂流記は、私達が忘れてしまっていた、家族や友達の大切さや、どれだけ自分が恵まれているのか等、いろいろな事を思いださせてくれる。こういった本はまだまだ世界中にあるだろう。それらを読むことで、日本はさらに豊かな国になっていくのではないだろうか。

佳作

『レキシントンの幽霊―沈黙』を読んで

電気電子工学科 一年

矢野 紘樹

「沈黙」とはどのようなものなのでしょう。辞書によると「だまって口をきかないこと。活動せずに静かにしていること。」とありました。

この本には主に三つのタイプの人間が出てきます。一つ目は、自分の世界を持ち、我慢強い人間。二つ目は、機会が来るまでじっと待ち、確実に捉えられ、人の心を実に巧みに掌握し煽動する能力を持つ人間。そして三つ目は、自分では何も生み出さず、何も理解していないのに受け入れやすい他人の意見に踊らされて、集団で行動する人間です。これらのタイプは、一人に一つずつとは限らないようです。一人の中にいくつものタイプがあり、いろいろな場面で見分けているようです。

私はこの本を読んでまず、自分がどれに当てはまるのかを考えました。私はいろんな場面によってどのタイプにもなってきた気がします。興味のあるものには周りに気をとられず、自分の世界に入り込めるし、会話をする時などは、相手の気持ちを察しながら話を誘導したりします。また、他の人から言われたことをそのまま

鵜呑みにして人や物を見たり、人数の多い方に賛成したりもします。この三つのタイプの中でよく表に出てくるのは三番目の自分だと思いません。

主人公は三つ目のタイプの人間が実は一番怖いと言っています。

「自分が誰かを無意味に、決定的に傷つけているかもしれないなんて思い当たりもしないような連中です。」

とあります。この文を読むと自分の根底にある闇の部分を見抜かれているような気がして、そのこと自体がとても怖いし、恥ずかしくて目をそらしたくなります。「ある日突然、僕のことを、誰一人信じてくれなくなるかもしれない。」そんな不安が六か月間続き、そして耐えた主人公。私も似たような経験をしたことがありました。それは以前転校を経験した時に、すぐに周りの雰囲気馴染めず、話をしてくれず、そのため理由もなく嫌なことを言われたり、変な目で見られたりしました。その時とても辛く、毎日が暗く感じられた事を思い出しました。でも、自分の場合は友達ができ、仲間が増えるとそれもなくなりました。だから、主人公と違った道を歩く事が出来ました。

「沈黙がしみこんでいく中、自分が溶けていきながらどれだけ叫んでも、誰も聞いてはくれない。」

まさに以前、私がほんの一瞬経験したのは「沈黙」だったと思います。そして今、私も主

人公と同様にそれに耐えたことで、その後の大抵の苦しいこと、辛いことは頑張っただけでもできるようなりました。しかしその反面、自分が他の人に沈黙を感じさせないか、今一度自分を見直してみる必要があると感じました。周りに流されるばかりの自分ではなく、意志を持って行動できる自分でありたいと思います。



佳作

『人間失格』を読んで

都市システム工学科 一年

諫山恭平

僕がこの本を読もうと思ったのは、「人間失格」というタイトルに強い印象を受けたとともに今の自分に必要な何かを得られるのではないかと感じたからです。

この作品は、第一の手記、第二の手記、第三の手記に分かれています。僕は第一の手記で主人公の残した一言に強い印象を受けました。その一言「恥の多い生涯を送ってきました」はあまりにも寂しく、そして哀しくも感じられました。この主人公は隣人とはほとんど会話ができません、何をどう言ったらいいのかわからないのです。そして主人公は道化をするようになります。ついには家の中でも道化をし別の自分を演じてしまうようになったのです。このことを想像してみると、それはとても苦しく、孤独を感じるのではないかと思います。

この作品の主人公は、そのように道化をすることで周囲の人を楽しませ、そして、その自分への偽りを人一倍、自覚している寂しい人間です。そして主人公はこういったことをまるで悪のように書いているのです。言い争いも自己弁

解もできず、人から悪く言われても自分がひどい思いがちをしているように感じ、内心、狂うほどの恐怖を感じているのです。僕はこういつたことから、ひどい寂しさや哀しさを感じました。主人公が金もあり、頭もよく、容姿もよく、全てに恵まれていたことから、道化をすることがよけいに哀しく感じられました。しかし、そういった道化をすることが本当に悪いことなのでしょうか。

他人の心が分からない、人を心から愛せない、と、書いてありますが、それはきつと主人公に道化をさせるような人間社会があったからだと思えます。それにより、主人公の本当の気持ちがおさえつけられているのではないかと、僕は感じました。誰も信用できないから、道化を演じて本当の自分を守っているようにも感じられます。他人との付き合いがうまくいかず、裏表の性格をもってしまったのだと思います。

しかし、この主人公のように別の自分を演じて生活している人はたくさんいると思います。僕はこの本を読んで、この主人公が「人間失格」ではなくて「人間そのもの」のように感じられました。人間はある程度、自分に偽りをもって生きており、それは自覚してはいけないのだと僕は思います。そしてこの主人公は、現代を生きる人間の姿だということが感じられました。

佳作

『ホームレス中学生』を読んで

機械工学科 一年

岩丸尚輝

「幸せ」とは何だろうか。

自分の中で、美味しい物を食べた時や、好きな事が思う存分できた時などに「幸せ」を感じたことはある。ただ、日々の生活の中で私はあまり「幸せ」「不幸せ」ということは考えた事はない。つまり私にとっての日々の生活というのは当たり前前の存在になっていたのである。

「幸せ」という言葉の意味を国語辞典で調べると、「物事が望む方に向かっていて満足できる状態」と、書かれている。

この本を読み、私が思い描いた「幸せ」の質はかなり高い場所に位置していたことに気づいた。それは私が今まで当たり前だと思ったご飯を食べる事、学校へ行く事、布団の上で寝る事など、日々の生活自体が既に幸せという事に気づいたからである。日々の生活の当たり前が満足できる状態という事なのだろう。その生活の一部でも欠けてしまうことは考えたくもない。

私には一人で公園でホームレスになるような勇氣はない。どうしてよいか全く分からない。この本の主人公はお金もないのに自分一人で生

きている。その度胸とたくましさには一目置く。

しかし、ここ数年間の不況の影響で日々の生活ができない人も今は珍しくない。まともな家がない人や、まともな食事にありつけてない人も少なくない。日本国内はこの状態であるが世界ではもっと貧しい生活をしている人が数多く存在している。なおかつ地域的な戦争は今もなお続いている。

このような人々のことを考えれば、やはり、私たちの当たり前前の生活はかなり幸せだと思える。それなのに私たちは幸せを実感できていないことは残念なことである。それは人間に欲が存在しているからだろう。またそれも皮肉なことである。

私は最終的に「日々の生活の中の当たり前が幸せ。」という結論に至った。毎日当たり前前様にあるご飯はまず残してはいけないし、水なども大切に使わないといけない。そして、何より学校に行って真剣に勉強しなければならぬ。

日々の生活というのは一見楽しくもなくなつたり見えないように見えるが、それがなくなった時その大切さが分かるのだろう。

私もこれからは日々の平穏な生活を大切に生活、感謝の気持ちを持って幸せを実感して生活していきたい。

佳作

『終末のフール』を読んで

制御情報工学科 一年

宮崎 慎也

「世界が終わる前にあなたは何をしますか？」
私は、「終末のフール」という本を教えるも
らったときに、自然と読んでみようという考え
になった。私は自分自身が死んでしまった時の
ことをあまりじっくりと考えたことがなかった
からだ。

まず、この本のあらすじだ。あと八年で地球
に小惑星が落ちてきて、地球は滅亡してしま
う。そう発表されて五年がたち地球滅亡の日を
三年後に控えたとき、仙台のとある団地に住む
人々は、残された日をどのように過ごしてい
くのか、ということを描いている。

一話目の主人公は、自分の娘の康子と喧嘩し
ていた。しかし、そんな時に、主人公の妻であ
る静江が主人公と康子に嘘をつき、二人を会わ
せて仲直りをさせようとする。そうした行動
に、静江や主人公は、主人公たちなりに地球滅
亡の前にやりたかったことを行ったのではない
かと思った。

そこで私は、もしも自分が主人公たちと同じ
状態になったらどうしよう、と考えた。

「もし、自分が三年後には地球が滅亡してし
まうとしたら、まず何をするのか……。」

そして、漸く考え出した答えが、「私は、な
にもせずに、普段のまま過ぐす」というもの
だ。本当のところは実際に地球滅亡が起こって
みないとわからないが、できることならそうし
たい。なぜなら、人はいつ死んでしまうかわか
らないからだ。そのことが「三年後」と、いつ
死んでしまうのが具体的にわかってしまってい
る、ただそれだけのことであってなんら変わ
りはない、と思ったからだ。

物語中の静江と主人公との会話で、静江が、
小惑星衝突は間違いだったというニュースを夢
で見た場面がある。そこから、静江は明日に希
望を持ち、三年後も生き続けたいと思っている
のではないかと私は想像した。

この物語には生と死についてたくさん考えさ
せられるものがあった。そこで私は、普段の生
活も一〇〇%の力で生きてみようと思った。い
つ死んでしまうかわからないからこそ毎日を一
生懸命に営む。それが掛け替えのない人生を
作っていく基になるのではないかと思ったから
だ。私は、私なりの生き方を完遂したい。

佳作

『告白』を読んで

都市システム工学科 四年

玉田 舞香

「私の娘は、このクラスの人に殺されたので
す」という、女教師の告白から始まり、すぐに
私は惹き付けられました。淡々と語る女教師の
告白に、生徒のざわめきは消え、次には悲鳴に
変わる、恐怖の空間が造られていく経過が描か
れていました。復讐のステップの一步を踏ん
だ、やりかえしてやるという宣言内容がとても
興味を持ちました。大切な一人の子どもを殺さ
れ、心が壊れてしまい、冷酷な女が進む確実な
道へと歩き始めていく展開がおもしろいなと思
いました。

生徒を追い詰めていく手順。学校に來続ける
生徒に対しても、学校に來なくなった生徒に対
しても、影で落とし入れるという、徹底した復
讐に、強い怨念を感じとれました。操作される
新任教師の計画一つ一つが生徒を苦しめていく
背景が最後になるにつれて分かり、深い物語だ
と思いました。

私がおも、その女教師の立場ならば、自分で
徹底した復讐を我慢しながら続けて行なってい
くことは出来ません。少年法で守られてしま

と分かっているとしても、警察に出頭させることしか出来ないと思います。強い憎悪の念が固まると、大きな復讐計画が練られ、実行する力が出るのかなと思いました。

「あなたの息子さんが私の娘を殺したのです」と打ち明けられた母親のそれからの生活も苦しいものだなと思いました。自分の教育が悪い方向に行ってしまった、息子に申し訳ないという気持ちで毎日駆け巡って、精神が病んでしまい、ついには息子を殺そうとしてしまうという結果が悲しかったです。しかし、母親よりも息子の方が狂っていて、逆に息子に殺されてしまうという、そのなりゆきはもつと悲しかったです。

考えさせられたのは、孤独な男子生徒と、それを理解しようとする孤独な女子生徒のささいな言い合いで、女子生徒が殺されてしまうという事件です。女子生徒の方は、男子生徒を守りたいと思います。支えようとしていたが、男子生徒の方は、ただの暇つぶしだった。そんな男子生徒の本質を本当に分からなかったのかと疑問に思います。殺人計画を練るといふ男子生徒の演技は、なかなか見破れないものかと思いました。

最後の復讐を自らの手で終えた女教師の気持ちはどんなものだったのだろうと考えても、結論はなかなか出ませんが、憎しみは減ることはないと思います。残酷な少年殺人事件に強く訴えかける、良い作品だということが分かりまし

た。娘を強く思う母親の気持ちを深く知らないといけないと思いました。



佳作

『涙恋歌』を読んで

電気電子工学科 四年

橋爪 里奈

この本を読んだ第一印象はこれは難しい話だな、でした。

この本の内容を簡単に説明すると、主人公の多縫キイロと蛹夏目は町から町への旅生活を送っている。蛹は「心の病を治す薬師」で旅の途中に出会う心の病にかかっている人達に薬を処方してあげるお話です。

この本の見所は、心に病がある人達とふれ合っていく事で主人公達もそれぞれの抱く思いがかわっていく所です。

私が一番好きな場面は、蛹は心に病を持つ患者達に薬を処方するのだが、その処方された薬に対しての患者の抱く思いが全然違う所です。例えば、薬を信じて治るのを待つ患者や、薬はあくまで薬だから自分も行動しないと考える患者です。

この部分を読んだ時、もし私が患者の立場にあるなら、後者の方の患者の思いを抱くと思えました。なぜかという、薬は病を治そうとする自分の手伝いをするものだと思うからです。薬をもらっても思う事がこんなにも人によって

かわるんだなどこの場面を読んで思いました。

最初にも書きましたが、この本は人の心を題材として書いているので、一回だけ読んでも難しく、理解できない文章が多くありました。なのでこの本は、一回で読みきる作品ではなく、同じ場面を何度も読んで登場人物の思い、それに対する行動を理解していく作品だと思いました。私は五回ほど読みましたが、初めて読んだ時に比べると同じ文面なのに注目して見る所が違っていておどろきました。

また、主人公の蛹夏目という登場人物自体がとても無愛想で、何を考えているのかわからない、つかみどころのない人物なので、蛹の行動を読んでいくだけでも、読みごたえがある本だなど思いました。

ストレスがいろんな病気をひきおこすというニュースを最近よく聞きますが、この本を読んだ、蛹達みたいな『心の病を治す薬師』が病院にいれば、簡単にそして短時間に笑顔になる人がふえるんじゃないかと思いました。

でも、この本の『あとがき』を見て、その考え方はまちがっていると考えなおさせられました。『あとがき』にはこう書いてあります。

『結論・悪いのは欲を持つことではなく、欲を持つ自分から目をそらすこと』と。

佳作

『フランダーズの犬』を読んで

電気電子工学科 一年

秋月 貴裕

『フランダーズの犬』を読み終えたあと、なんとなくやりきれない気持ちになりました。

貧乏というだけで、理不尽な偏見や差別を受けなければならぬのだろうか？ 僕は、複雑な気持ちになりました。

「ラストシーンは感動したよね」

「うん、あれは泣けた」

これは、友達と書店で『フランダーズの犬』を見つけてその本を軽くめぐりながら交わした会話です。友達が言ったそのラストシーンは、ネロとパトラッシュが天に召されるシーンのことを指して言ったのでしょうか。

その時の会話を思いだし、僕はまた読みたくなり、この夏は、『フランダーズの犬』を読むことに決めました。本でもアニメでも泣いたこの名作を読めると思うと、心が躍りました。

しかし、この本を今回読み終わった時、前とは、違う感情がわいてきました。前に読んだ時は小学校の時だからか、深く考えなかったんだと思います。

「ネロは幸せだったのかな？」

そんな疑問がわいてきました。

「幸せだったんだ。純粹なまま大好きなパトラッシュと天に召されたんだから。もしネロが死なずに画家として成功していたとしても、だまし合いの世界でお金にまみれて生きていくなんて、幸せだとは思わないから。でも十五歳で死ぬなんて……」

そんな答えを自分で出しながら、深く考えていました。

「フランダーズの犬」のすごさは、深く考えさせるところにあるんじゃないかと思いました。だから、感動を読んだ人全てに与えることができるのでしょうか。

最後に、もう一度読み返してみました。すると、一度考えた僕は、「フランダーズの犬」の全てに、素直に感動していました。僕は、この本にいろいろな事を感じさせられ、学びました。僕は、感謝の気持ちでいっぱいです。

編集後記

学生図書委員長（制御情報工学科五年）

梨子木 亮 太

図書委員長になって二年。読書感想文の評価をさせていたくのも二回目になりました。私は特に作文を作るのが苦手で小学校、中学校の宿題で作文を書かなければならない時もいつも後回しにして先生に怒られていました。なので上手な作文を選ぶ、というよりは自分の気に入った作文を選ぶ、という気持ちで読書感想文を読ませていただきました。

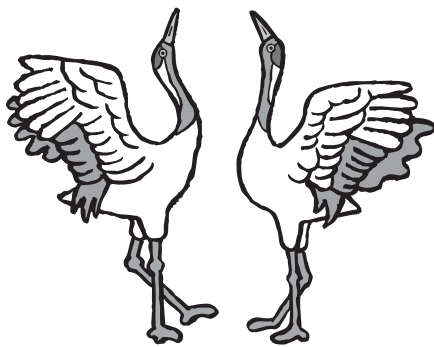
さて、今回の読書感想文は特に「自分の気持ちを伝える」ということの手な作品が多かったような気がします。高専は工業系の学校で技術文章を書くことが多いため、「自分の気持ちを文章にする」ことが比較的苦手な人が多いのではないかと思いますが、今回の作品はそれを感じさせない、思わず食い入るように読んでしまうほど気持ちの伝わってくる作品が多かったように感じました。

レポートを書く力とはまた違い、自分の気持ちを文章にして伝えるということは簡単そうに思えてとても難しいものです。私は自分の気持ちをうまく表現できずに悔しい思いをしたことが何度もあります。私はそのような自分の気持ち

ちを文章にする力は読書によって身につけていくと思っています。たくさんの本を読み、いろんな考え方、表現に出会うことによってこそうまく自分の気持ちを表現することができるようになるのではないのでしょうか。

皆さんは本を薦め合える友達は何人居るでしょうか。私は五年生になって忙しくなり、読書の時間がめっきり減ってしまいました。そんな中でも友達に薦められた本はついつい読んでしまいます。趣味の合う友達が薦めてくれる本はとても面白く、読んだ後に感想を言い合うことはとても楽しいことです。自分では見つけることのできなかつた面白い本を友達を通して発見する。とても有意義なことだと思います。皆さんもぜひ友達と本を薦め合ってみてはどうでしょうか。

たくさんの中から自分の好きな本を見つけることはとても楽しく、自分の為になることです。しかしたまにはあまり読まないような本を読んでみる、というのもきっと自分の為になると思います。皆さんもぜひ、敬遠せずにいろんな本を読んでください。



「もさく」 第三十八号

発行日 平成二十三年二月十一日

発行者 大分県大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

印刷所 小野高速印刷株式会社
住所 大分市松原町二一―一六
電話 ○九七―五五八―三四四四

